

# GitHub 入門（個人演習）

産業技術大学院大学  
中鉢欣秀

2016-08-18

## 1 Git 入門

### 1.1 Git の操作方法と初期設定

#### 1.1.1 Git チートシート（カンニング表）

- 主な Git コマンドの一覧表
  - [Git チートシート（日本語版）](#)
- 必要に応じて印刷しておくとい

#### 1.1.2 Git コマンドの実行確認

- 端末を操作して Git コマンドを起動してみよう。
- 次のとおり操作することで Git のバージョン番号が確認できる。

```
1 git --version
```

#### 1.1.3 名前とメールアドレスの登録

- (まだなら) git に名前とメールアドレスを登録しておく
- 次のコマンドの \$NAME と \$EMAIL を各自の名前とメールアドレスに置き換えて実行せよ
  - 名前はローマ字で設定すること

```
1 git config --global user.name $NAME
2 git config --global user.email $EMAIL
```

#### 1.1.4 その他の設定

- 次のとおり、設定を行っておく
  - 1 行目：色付きで表示を見やすく
  - 2 行目：push する方法（詳細省略）

```
1 git config --global color.ui auto
2 git config --global push.default simple
```

#### 1.1.5 設定の確認方法

- ここまでの設定を確認する

```
1 git config -l
```

### 1.2 Git のリポジトリ

#### 1.2.1 プロジェクト用のディレクトリ

- リポジトリとはプロジェクトでソースコードなどを配置するディレクトリ
  - このディレクトリを「ワーキングディレクトリ（ないしはワーキングツリー）」とも言う
- Git によりバージョン管理ができる
  - ファイルに対する編集作業の内容が追跡され、記録される
- 将来的に GitHub と連携させることで共同作業ができるようになる

#### 1.2.2 Git リポジトリを利用するには

- リポジトリを利用する方法には主に 2 種類ある
  1. git init コマンドで初期化する方法
  2. git clone コマンドで GitHub から入手する方法
- ここでは、まず 1. について解説する

#### 1.2.3 Git リポジトリの初期化方法

- my\_project ディレクトリを作成し、Git リポジトリとして初期化するコマンドは次のとおり
  - 1 ~ 2 行目：ディレクトリを作成して移動
  - 3 行目：ディレクトリをリポジトリとして初期化

```
1 mkdir ~/my_project
```

```
2 cd ~/my_project
3 git init
```

- 以降の作業は作成した my\_project ディレクトリで行うこと
  - 現在のディレクトリは「pwd」コマンドで確認できる

#### 1.2.4 リポジトリの状態を確認する方法

- 現在のリポジトリの状態を確認するコマンドは次のとおり

```
1 git status
```

- このコマンドは頻繁に使用する
- 何かうまく行かないことがあったら、このコマンドで状態を確認する癖をつけるとよい
  - 表示される内容の意味は徐々に覚えていけば良い

#### 1.2.5 「.git」ディレクトリを壊すべからず

- ティレクトリにリポジトリを作成すると「.git」という隠しディレクトリができる
  - ls -a で確認できるが…
- このディレクトリは 絶対に手動で変更してはならない
  - もし削除したら Git とは無関係の単なるディレクトリになる

### 1.3 コミットの作成方法

#### 1.3.1 コミットについて

- Git の用語における「コミット」とは、「ひとかたまりの作業」をいう
  - 新しい機能を追加した、バグを直した、ドキュメントの内容を更新した、など
- Git は作業の履歴を、コミットを単位として管理する
  - コミットは次々にリポジトリに追加されていき、これらを記録することでバージョンの管理ができる（古いバージョンに戻る、過去の変更内容を確認する、など）

- コミットには、作業の内容を説明するメッセージをつける
  - 更に、コミットには自動的に ID が振られることも覚えておくと良い

#### 1.3.2 README ファイルの作成

- my\_project リポジトリに README ファイルを作成してみよう

```
echo "My README file." > README
```

- プロジェクトには 必ず README ファイルを用意しておくこと

#### 1.3.3 リポジトリの状態の確認

- git status で現在のリポジトリの状態を確認する

```
git status
```

- 未追跡のファイル（Untracked files:）の欄に作成した README ファイルが（赤色で）表示される

#### 1.3.4 変更内容のステージング

- コミットの一つ手前にステージングという段階がある
  - コミットしたい変更はステージングしておく
    - \* 逆に言えば、変更をコミットするためには、ステージングしておかなくてはならない
  - 新しいファイルをステージングすると、これ以降、git がそのファイルの変更を追跡するようになる
    - \* これをトラッキングという

#### 1.3.5 ステージングの実行

- 作成した README ファイルをステージングするには、次のコマンドを打つ

```
git add .
```

- 「git add」の「.（ピリオド）」を忘れないように

- ピリオドは、リポジトリにおけるすべての変更を意味する
- 複数のファイルを変更した場合には、ファイル名を指定して部分的にステージングすることもできる…
  - \* が、このやりかたは好ましくない
  - \* 一度に複数の変更を行うのではなく、一つの変更を終えたらこまめにコミットする

### 1.3.6 ステージング後のリポジトリへの状態

- 再度、git status コマンドで状態を確認しよう

```
git status
```

- コミットされる変更 (Changes to be committed:) の欄に、README ファイルが (緑色で) 表示されれば正しい結果である

### 1.3.7 ステージングされた内容をコミットする

- ステージング段階にある変更内容をコミットする
- コミットにはその内容を示すメッセージ文をつける
- 「First commit」というメッセージをつけて新しいコミットを作成する
  - 「-m」オプションはそれに続く文字列をメッセージとして付与することを指示するもの

```
git commit -m 'First commit'
```

### 1.3.8 コミット後の状態の確認

- コミットが正常に行われたことを確認する
  - ここでも git status コマンドが活躍する

```
git status
```

- 「nothing to commit, ...」との表示からコミットすべきものがない (=過去の変更はコミットされた) ことがわかる
- この表示がでたら (無事コミットできたので) 安心してよい

## 1.4 変更履歴の作成

### 1.4.1 更なるコミットを作成する

- リポジトリで変更作業を行い、新しいコミットを追加する
  - README ファイルに新しい行を追加する
- 次の \$NAME をあなたの名前に変更して実行しなさい

```
echo $NAME >> README
```

- 既存のファイルへの追加なので「>>」を用いていることに注意

### 1.4.2 変更後の状態の確認

- リポジトリの状態をここでも確認する

```
git status
```

- コミットのためにステージされていない変更 (Changes not staged for commit:) の欄に、変更された (modified) ファイルとして README が表示される

### 1.4.3 差分の確認

- トラックされているファイルの変更箇所を確認する

```
git diff
```

- 頭に「+」のある (緑色で表示された) 行が新たに追加された内容を示す
  - 削除した場合は「-」がつく

### 1.4.4 新たな差分をステージングする

- 作成した差分をコミットできるようにするために、ステージング段階に上げる

```
git add .
```

- git status を行い、README ファイルが「Changed to be committed:」の欄に (緑色で) 表示されていることを確認する
- ステージさせると git diff の結果が空になる

- この場合、「git diff -staged」で確認可能

#### 1.4.5 ステージングされた新しい差分のコミット

- 変更内容を示すメッセージとともにコミットする

```
git commit -m 'Add my name'
```

### 1.5 履歴の確認

#### 1.5.1 バージョン履歴の確認

- これまでの変更作業の履歴を確認
  - 2つのコミットが存在する

```
git log
```

- 各コミットごとに表示される内容
  - コミットの ID (commit に続く英文字と数字の列)
  - Author と Date
  - コミットメッセージ

#### 1.5.2 (参考) 一つのファイルの履歴

- 将来、複数のファイルを履歴管理するようになったら特定のファイルの履歴のみ確認したい
- その場合、次のとおりにする

```
git log --follow README
```

#### 1.5.3 2つのコミットの比較

- 異なる2つのコミットの変更差分は次のコマンドで確認できる
  - コミットの ID は log で確認できる (コマンドで ID を指定する場合は、概ね先頭4文字を入力し後は省略してよい)

```
git diff $COMMIT_ID_1 $COMMIT_ID_2
```

- (参考) 後で説明するブランチはコミットのエイリアスなので、ブランチごとの比較もできる

#### 1.5.4 コミットの情報確認

- 次のコマンドでコミットで行った変更内容が確認できる

```
git show $COMMIT_ID
```

#### 1.5.5 (参考) HEAD によるコミットの指定

- 特定のコミットの ID を指定する方法に「HEAD」を使った相対指定があるが、なれないと間違いやすい
  - show コマンドで確認しながら用いると良い

```
git show HEAD~1  
git show HEAD~1^2
```

### 1.6 ブランチの使い方

#### 1.6.1 ブランチとは

- 「ひとまとまりの作業」を行う場所
- ソースコードなどの編集作業を始める際には必ず新しいブランチを作成する
- Git の内部的にはあるコミットに対するエイリアス (alias) である

#### 1.6.2 master は大事なブランチ

- Git リポジトリの初期化後、最初のコミットを行うと master ブランチができる
- 非常に重要なブランチであり、ここで 直接編集作業を行ってはならない
  - ただし、本演習や、個人で Git を利用する場合はこの限りではない

#### 1.6.3 ブランチの作成と移動

- 新しいブランチ「new\_branch」を作成して、なおかつ、そのブランチに移動する
  - 「-b」オプションで新規作成
  - オプションがなければ単なる移動 (後述)

```
git checkout -b new_branch
```

- 本来、ブランチには「これから行う作業の内容」が分かる名前を付ける

#### 1.6.4 ブランチの確認

- ブランチの一覧と現在のブランチを確認する

- もともとある master と、新しく作成した new\_branch が表示される

```
1 git branch -vv
```

- ブランチに紐づくコミットの ID が同じことも確認
- git status の一行目にも現在のブランチが表示される

#### 1.6.5 ブランチでのコミット作成

- README に現在の日時を追加

```
1 date >> README
2 git add .
3 git commit -m 'Add date'
```

- 新しいコミットが追加できたことを git log で確認
- git branch -vv でコミットの ID が変化したことも確認

#### 1.6.6 ブランチの移動

- new\_branch ブランチでコミットした内容を master に反映させる
  - まずは master に移動する

```
1 git checkout master
```

- git status, git branch -vv で現在のブランチを確認すること
- この段階では、README ファイルに行った変更が 反映されてない ことを確認すること

#### 1.6.7 変更を master にマージ

- new\_branch で行ったコミットを master に反映させる

```
1 git merge new_branch
```

- README に更新が反映されたことを確認
- git branch -vv により両ブランチのコミット ID が同じになったことも確認

- git log も確認しておきたい

#### 1.6.8 マージ済みブランチの削除

- マージしたブランチはもはや不要なので削除して良い

```
git branch -d new_branch
```

- git branch -vv コマンドで削除を確認

#### 1.7 （参考）操作を取り消すコマンド

##### 1.7.1 Git で行った操作の取り消し

- まちがって
  - ファイルをステージングさせた！
  - ステージングをコミットした！
- などの場合、操作を取り消すことができる
  - 後で説明する push までしてしまった場合については後述

##### 1.7.2 ステージング/コミットの修正

ファイルのステージングを取り消す

```
git reset $FILE
```

\$COMMIT\_ID より後のコミットの取り消し（ローカルは保存）

```
git reset $COMMIT_ID
```

\$COMMIT\_ID より後のコミットの取り消し（ローカルの変更も破棄）

```
git reset --hard $COMMIT_ID
```

##### 1.7.3 誤って編集や削除や修正したファイルの回復

- file.txt を誤って編集や削除した場合
- add する前
  - ステージング領域（インデックスともいう）からの取り出し

```
git checkout file.txt
```

- add した後
  - 直近のコミットからの取り出し

```
git checkout HEAD file.txt
```

## 1.8 (参考) ファイルの削除と名前の変更

### 1.8.1 Git が追跡するファイルの削除と名前の変更

- Git が追跡しているファイルであっても、シェルの `rm` コマンドや `mv` コマンドで削除や名前の変更をしてよい
- 「`git add .`」コマンドを実行すると、Git は削除や名前の変更も自動的に検知する
  - 参考：古いバージョンの git では「`git rm`」や「`git mv`」コマンドを利用する必要があった

### 1.8.2 Git に無視させたいファイル

- ツールが生成する中間ファイルなど、Git で管理させたくないファイルは「`.gitignore`」ファイルに記述しておく
- そこに記述されたファイルは、Git は追跡しない（`git add .` でも追加されない）
- なお、「`.gitignore`」ファイル自体は Git がトラッキングするファイルに含める
- `.gitignore` の書き方については各自で調べよ

## 1.9 (参考) 作業の一度中断と再開

- あるブランチで作業中に他のブランチに一時的に移動したいことがある
  - 作業の途中で `master` ブランチを最新にする、など
- このような場合、`git stash` コマンドが活用できる
- 詳細については各自で調べよ

## 2 GitHub 入門

### 2.1 GitHub とは

#### 2.1.1 GitHub でソーシャルコーディング

- ソーシャルコーディングのためのクラウド環境
  - [GitHub](#)
  - [GitHub Japan](#)
- GitHub が提供する主な機能

- GitHub flow による協同開発
- Pull requests
- Issue / Wiki

### 2.1.2 GitHub アカウントの作成

- (まだなら) 次の URL の指示に従い GitHub アカウントを作成
  - [Signing up for a new GitHub account - User Documentation](#)
- アカウントの種類
  - 無料版で作成する場合「Join GitHub for Free」を選択する
  - 学生の場合「Student Developer Pack」にアップグレードすることもできる
- その後、確認メールが届くので、必要に応じて残りの手順を実施せよ
  - [GitHub Help](#)

### 2.1.3 SSH による GitHub アクセス

- GitHub へのアクセスは SSH を用いた公開鍵暗号方式の認証を用いる
  - SSH 公開鍵の設定を行えば以降のパスワード認証が不要になる
- (まだなら) SSH を生成して GitHub に登録しなさい
  - 鍵を生成するとき「`passphrases`」が聞かれるが、この演習では何も入力しなくてよい
  - [Generating an SSH key - User Documentation](#)
- もし SSH の登録がうまく行かなかったら、HTTPS を用いて接続し、GitHub のユーザ名とパスワードでアクセスできる

## 2.2 リモートリポジトリ

### 2.2.1 リモート VS ローカルリポジトリ

- ローカルリポジトリ
  - `git init` コマンドを用いて作成したリポジトリを「ローカルリポジトリ」という
- リモートリポジトリ
  - 「リモートリポジトリ」とは、サーバ上にあるリポジトリであり、ローカルのリポジトリ

りと連携させることができる

- リモートリポジトリの利点
  - ネットワークを経由してどこからでも利用することができる
  - 複数人のチームで協同作業をするときに活用できる

### 2.2.2 リモートリポジトリの作成

- リモートリポジトリを GitHub で作成する
- 名前は「our\_project」とする
- 次の手順で作成する
  - [Creating a new repository - User Documentation](#)

## 2.3 GitHub flow

### 2.3.1 GitHub floww による開発の流れ

- GitHub flow
  - [Understanding the GitHub Flow · GitHub Guides](#)
- 言葉による説明
  1. リモートリポジトリをローカルに複製
  2. master から作業用ブランチを作成
  3. ブランチで編集作業
  4. ブランチでコミットの作成
  5. ブランチをリモートに送る
  6. GitHub でプルリクエストを作成
  7. GitHub でレビュー（+自動テスト）
  8. GitHub でプルリクエストをマージ
  9. ローカルの master を最新にする（2. に戻る）

### 2.3.2 1: リモートリポジトリをローカルに複製

- リモートにあるリポジトリをローカルに複製することを clone という
  - [Cloning a repository - User Documentation](#)
- 下記の「\$GITHUB\_URL」の部分を GitHub にある our\_project リポジトリの URL にして実行
  - リモートの URL はブラウザで確認する
  - SSH 接続の場合、URL は「git@...」(HTTPS の場合「https:...」)

```
1 cd ~
2 git clone $GITHUB_URL
3 cd our_project
```

- この作業は基本的にはプロジェクトに対して一度だけ行うこと
  - 別なマシンで作業したいときなどは話は別

### 2.3.3 2: master から作業用ブランチを作成

- 作業用のブランチを作成して移動する
  - ブランチの名前は「greeting」とする

```
1 git checkout -b greeting
```

### 2.3.4 3: ブランチで編集作業を行う

- ここでは、hello.txt という名前のファイルを作成する

```
1 echo 'Hello GitHub' > hello.txt
```

### 2.3.5 4: ブランチでコミットを作成

- 変更した内容をステージングしてからコミットする

```
1 git add .
2 git commit -m 'Create hello.txt'
```

- この編集、add、commit の作業は作業が一区切りつくまで何回も繰り返してよい…
  - が、こまめに push するのが良いとされる

### 2.3.6 5: ブランチをリモートに送る

- ブランチで作成したコミットをリモートに送る (push)
  - 下記の origin はリポジトリの URL の別名として自動で設定されているもの
  - greeting は作業しているブランチ名

```
1 git push -u origin greeting
```



### 2.3.7 6. GitHub でプルリクエストを送る

- ブランチが GitHub に登録されたことを確認し、Pull request を作成する
- 手順は次のとおり
  - [Using pull requests - User Documentation](#) の前半
  - [Creating a pull request - User Documentation](#)

### 2.3.8 7. GitHub でレビュー（＋自動テスト）

- プルリクエストを用いたレビューの方法は下記参照
  - [Using pull requests - User Documentation](#) の後半
- 人手によるレビューの他、自動的なテストも行うのが望ましい
  - 説明は省略

### 2.3.9 8. GitHub でプルリクエストをマージ

- Pull request のレビューが済んだらマージする
  - [Merging a pull request - User Documentation](#)
- マージが完了したら、ローカル・リモート共に、マージ済みのブランチは削除してよい

### 2.3.10 9. ローカルの master を最新版にする

- GitHub で行ったマージをローカルに反映させる
  - master ブランチに移動して git pull
  - 不要になった作業用ブランチは削除

```
1 git checkout master
2 git pull
3 git branch -d greeting
```

### 2.3.11 GitHub Flow に習熟するには？

- ここで手順 2: に戻り、一連の作業を複数回（5 回以上!）繰り返すこと
  - 体に叩き込む！

### 2.3.12 参考：git fetch

- git fetch はリモートにあるブランチの最新情報をローカルに取ってくるコマンド
- git pull は次の 2 つの命令を実行することと同じ意味

```
git fetch
git merge origin/master
```

## 2.4 コンフリクトについて

### 2.4.1 GitHub flow におけるコンフリクトについて

- コンフリクトとは？
  - コンフリクトは、コードの同じ箇所を複数の人が別々に編集すると発生
- コンフリクトが起きると？
  - GitHub に提出した Pull requests が自動的にマージできない
- 基本的な対処法
  - 初心者は、演習の最初の方では「他人と同じファイルを編集しない」ことにして、操作になれる（上達したら積極的にコンフリクトを起こしてみて、その解決方法を学ぶ）
  - コミットはできるだけ細かく作成すると良い（その分、他の人とかち合う可能性が減る）
  - Pull requests でコンフリクトが発生し、自動的にマージできない状態になったら、その PR を送った人がコンフリクトを自分で解消する（あるいは解消方法をメンバーに聞く）

### 2.4.2 GitHub でのコンフリクトの解消方法

- new\_feature ブランチで作業中であり、最新の更新は commit 済とする
- 解消するための操作は次のとおり
  - 1: 一度 master ブランチに移動. 2: 手元の master を最新版に. 3: 作業中のブランチへ. 4: ここで master を手動でマージ. コンフリクトが発生するので解消する. 5: このブランチを再度 push
- これにより、プルリクエストがマージ可能になる



れば成功

```
1 git checkout master
2 git pull origin master
3 git checkout new_feature
4 git merge master
5 git push origin new_feature
```

#### 2.4.3 push 済みのコミットの取り消し

- 最後に行ったコミットが理由でコンフリクトが発生したような場合，次の操作により，「取り消しコミット」を作成することができる

```
1 git revert HEAD
```

- 最後の作業が取り消されていることを確認
- その後は，この取り消しコミットを **push** すると，リモートでの変更内容も取り消される